

# TAKESHIS'

2005(平成17)年11月13日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★



監督＝北野武／出演＝ビートたけし／京野ことみ／大杉漣／岸本加世子／寺島進／渡辺哲／美輪明宏／松村邦洋／内山信二／早乙女太一（松竹、オフィス北野配給／2005年日本映画／107分）

……「たけしたち」とは、大物タレントのビートたけしと売れない役者の北野武の2人。過去の北野映画の名シーン（？）が次々と出てくるが、大半は全く脈絡のない夢の中のお話ばかり。こりゃ北野監督の趣味的世界をそのままスクリーンに持ち込んだだけで、つまらないことおびたしい……。北野映画にはピストルがつきものだが、こんなに銃の乱射ばかりやって、何が嬉しいの……。期待した（？）京野ことみのヌードも全く期待はずれ……。世界の北野なら、もう少しまともな作品をつくってよ……。

## 『TAKESHIS'』とは？

『TAKESHIS'』すなわち「たけしたち」とは、大物タレントのビートたけしと売れない役者の北野武の2人。ビートたけしには、マネージャーの大杉漣と愛人の京野ことみがいつも同行しているが、北野はいつもひとりぼっち。そして北野は、ビートたけしが主演した映画での数々の活躍シーンを夢見ている様子。他方、ビートたけしも肩で風を切って歩いているものの、内心は不安でいっぱい。したがって、このビートたけしと北野は、全くの他人ながら実は一心同体……そんな顔つきが全く同じ「TAKESHIS'」が、夢の中できり広げるワケのわからない世界とは……？

## 第62回ベネチア国際映画祭は？

この『TAKESHIS'』はその内容もサプライズなら、上映の仕方もサプライズ

……。2005年9月の第62回ベネチア国際映画祭でこの映画は、異例の「サプライズ上映という形式で招待され、ワールドプレミア上映」となったとのこと。パンフレットには「終映後の監督へのスタンディング・オベーションは5分間の長きにわたりました」と書かれているが、一般の新聞報道を読む限り、観客の反応はイマイチだったよう……。また、密かにベネチア入りしていた北野武監督は、「俺の方がよっぽどサプライズだ」とコメントし、「我、奇襲ニ成功セリの心境」とにんまりしたとのことだが、なぜそこまで奇をてらったことをやるの……？

## 難解な解説の数々にウンザリ

この映画のパンフレットには、北野武監督のインタビューと山根貞男（映画評論家）の「北野映画群の森のなかへ 『TAKESHIS'』の魅力を読む」がある。また『キネマ旬報』11月下旬号は、巻頭に監督のインタビューをのせたうえ、「北野武からの挑戦状 『TAKESHIS'』をどう読み解くか」という特別企画を組み、7人の映画評論家が『TAKESHIS'』の「解剖」をしている。まず、監督自身がインタビューで語っていることは、私にはカッコのつけすぎとしか見えないし、山根貞男氏の評論はパンフレットにのせる文章を意識したためか、ゴマすり評論の感も……？

他方、『キネマ旬報』の7人は、さすがに自由な立場からさまざまな視点を示しているが、あまりいい評価をしていないことは、その文脈から明らか……。どちらにしても、チンプンカンプンな映画を評論しようとするれば、その評論もチンプンカンプンで難解なものになるのはやむをえないのかも……？

## 京野ことみのヌードは……？

7人の解説者の1人秋本鉄次氏は、「北野武初(?)の“有名女優完脱ぎ”の快挙(?)」と書いている。実は私はもともとこの映画の「つまらなさ」を予感していたため、「世界の北野の映画だから一応観ておかなければ」という義務感だけでは映画館に足を運ばなかったはず。ところが、やっぱり行ってみよう！と決心したのは、この評論を読んだため……？

秋本鉄次氏は「オヤジ系週刊誌の見出し風に言えば、“衝撃の乳房完全露出、

京野ことみ濡れ場！”と書いていたので、そのシーンに大いに期待していた(?)ののだが、残念ながらこの見出しは誇大広告！京野ことみが、「たけしの愛人」としての濡れ場と「寺島の女」としての濡れ場の両方を見せてくれるものの、『化身』(86年)での黒木瞳のヌードや『でらしね』(02年)での黒沢あすかのヌード、そして『透光の樹』(04年)での秋吉久美子のヌードのようなあっと驚くような衝撃度はなく、私には全くの期待外れ……。

さて、あなたの評価は……？

### 悪趣味もええ加減に……

この映画には、北野武監督が夢の中で考えるさまざまな悪趣味的(?)なシーンがふんだんに盛り込まれている。京野ことみは、はじめて本格的に北野監督に抜擢されたのだから、どんな役でも喜んでやればいいし、松村邦洋レベルもそれでいいと思う。しかし、自分のスタイルをしっかりと持っているはずの美輪明宏やいい役をいくらでも演じることができる岸本加世子、さらに北野映画の常連である大杉漣、寺島進、渡辺哲らがそれぞれくだらない役を当然のように演じているのが私には不思議でならない。それぞれ俳優としてのプライドを懸けて、こんな映画づくりについて、意見(異議)を述べてもいいのでは……？

この映画の悪趣味の最たるものは、デブコンビ2人の上にさらに数名が乗り込み、完全に定員オーバーとなった北野運転のタクシーが、死体がゴロゴロと転がっている道路を、死体を避けながらトロトロと進んでいくシーン。こりゃちょっとエグすぎるのでは……？ それにしても、「世界の北野」はこんな夢を時々観ているのだろうか……？

### どうしてこんなに銃の乱射が好きなの……？

北野映画の特徴は、セリフの少なさと行動の意外性……？ ヤクザ映画になるとそれがとりわけ顕著になるとともに、北野武本人が演じると『血と骨』(04年)における主人公のように寡黙で狂暴な主人公になってしまう……。そして北野監督が好きなのは、拳銃やマシンガンの撃ち合い……？

この映画は、ビートたけしや北野が夢の中で見るさまざまな妄想が何の脈絡も

なく（あるいは北野監督の独自の脈略で）次々と展開されていくものだが、ここでは銃の乱射シーンがやたら多い。ヤクザ同士の抗争シーンや強盗に入った銀行での銃の乱射シーンはまだ認められるものの、後半のハイライトシーン（？）となる機動隊や着流しのヤクザ、そして全共闘の闘士たちが入り混じった部隊（？）と北野とのマシンガンの乱射シーンを観ていると、あまりにもバカげており、北野監督ってどうしてこんなに銃の乱射が好きなの……？ と思ってしまう。さらに、こんな意味のない乱射シーンのくり返しは、子供の教育上も決してよろしくないはず！

### 脈略のない夢の中のお話にウンザリ……？

北野監督はそのインタビューでアレコレと語っているが、私に言わせれば、要はこの映画は彼がそれまでにつくった11本の映画の面白そうなところをくっつけて、自分自身の分身であるビートたけしと北野の両方の視点からさまざまな妄想とともにつながり合わせただけのもの……。

したがって、そこに登場してくる人物たちは、少なくとも一人二役以上を演ずるという苦勞をしているが、映画界でよくいう、そこに登場すべき「必然性」など全くない人物ばかり。とりわけ2人のデブコンビや女形の親子、そしておっかけのお嬢さんなどの人物像は、全体としてのバカバカしさを増幅させるだけの存在……？

ビートたけしにうらみをもつ女、岸本加世子が何と7つの役で登場して存在感を見せているが、これもストーリー上は何の魅力もないもの。北野武監督本人は楽しいのかもしれないが、そんな脈略のないさまざまな妄想をスクリーン上で次々と観せられたのでは、観客はたまったものではない。「世界の北野映画」だから我慢して最後まで観たものの、ウンザリし、いつ途中で帰ろうかと思ったほど。

したがって今日は久しぶりに、もったいなかったと思う時間を映画館で過ごすことに……。

2005(平成17)年11月15日記